



# 蔡温の琉球国家論

〈中〉

グレゴリ・J・スミッツ

蔡温の薩摩観、特に薩摩なしという幸いな状況に至る。琉球との関係のあり方を考えてみよう。蔡温は「昔は我が国には政道は普及しておらず、農民は、耕作を油断したので必要な物が足りなくなり、道徳や習慣も悪くなった。度々革命になるほどの騒ぎも興ったし、万民は皆困窮に陥るといふ言語道断の状況があった。しかし薩摩の支配下になつてから、そのお陰で道徳や習慣はよくなり、農民も一生懸命に耕作に努めたので、國中、必要な物は不足

と琉球との関係のあり方を見てきた」と薩摩をほめた。府、地元の強欲で墮落した現実をよく認めていた蔡温の薩摩への賞賛をどう見なしたらよいただろうか。

## なぜ薩摩支配を称賛

### 儒学的立場の政治強調

もち論、蔡温は、薩摩と薩摩の支配を嫌っていたが、建て前としては薩摩をほめるよりほかなかったというような解釈を私はよく読んだ。これはある程度、正しいだろうが、果たしてそれだけであるのかと疑問に思ってきた。その理由は、儒学的な価値観からみると、古

役人や豪農を抑制できぬ王は、儒学的な政府と大分違い、本当の政府とは言えないのである。儒学的な理に基づいた国のための政府は十八世紀には完成したの

である。近世に琉球王府の政治組織が最も発達し、最も合理化されたことの一つの原因は、向象賢や蔡温の努力によるものである。しかし薩摩の琉球侵略がその最初の強いインパクトであったのである。もち論、薩摩は琉球を助けるために侵略

当時の蔡温は薩摩をよくほめるほか仕方がなかったたので彼が本当に抱いた薩摩観は分かりえないかも知れない。だが儒者である蔡温の琉球侵略がその最初の強いインパクトであった。昔は我が国には政道は普及しておらず」というよう

に基づく政治を強調するたなかかったが前の「我が国の資源や力は充分には及ばない」などによって琉球のランクは最も下の段階だと考えていたことが推測できる。そして、「しかしもし御政道本法に従って政治を行えば、下国の下段階の国でさえも、その国の力や大きさに応じて安定した社会を築くことができる」という見込みについても述べている。琉球は一番下のランクであり、古琉球の時代には「度々革命になるほどの騒ぎも興った」という安定していない状態もあったが、もしこれから儒学を持ってそれに従ってよい政治を實行すれば、琉球も立派な一

（琉球史研究家）

蔡温は儒学的な世界の中心の琉球の国家としての可能性を強く述べた。だが一方、薩摩の支配という問題はまだ残っている。具体的に言えば、薩摩を通して日本の幕藩体制に組み込まれた琉球がどのような役割を担った一国として存在できるのか。儒学という普遍的な思想を通しての琉球と薩摩の関係はどうかあるべきか、ということである。

# 蔡温の琉球国家論

〈下〉

グレゴリ・J・スミッツ

蔡温は薩摩を「御国元」と称した。彼は薩摩が琉球の国としての存在を支えていると論じた。薩摩が琉球の「元」という役割をどのように果たしていたかという事は、朱子学の存在論と強い関係がある。蔡温は「国家と言え、大国、小国にかかわらず、陰陽五行が備わり、そして五倫四民の道が確立されればその

ところは国家と言え。五行の中の水火土はどこでもあるが、金と木がなければそのところは国家とは言えない。我が土地の場合は、金はないけれども森林資源はある。金は御国元(薩摩)から輸入でき、それにより不足がないので我が土地は昔から国と呼ばれている」と述べた。蔡温が森林資源を重視し、色々な森林対策を行ったことの一つの理由が、ここに見られる。これは朱子学に基づく蔡温の具体的な国家の定義で

素を薩摩が付与していたのである。薩摩からの物質的要素である。しかし五行が十分あっても、これだけなら国家にならない。五行はただ物質なのである。「五倫四民」、つまり儒学の教えに即している政府組織や社会構造も必要である。

蔡温は「五倫四民」を成し遂げるのは金を輸入するより難しく、立派な課題

蔡温は「五倫四民」の道の実践にほかならないと蔡温は考えたのである。蔡温の琉球国家論における薩摩の琉球の関わりは「昔の聖人のキャリアを考えたなら、彼の琉球国家論は決して空論とは言えない。蔡温の場合には理論と実践は別でなく、相互補足的なものである。蔡温は、外国から来た古琉球の社会に合わない思想である儒学を、十八世紀の琉球社会に押し付けてみ

たのだが、実は、それは彼が自分の国を愛していたがためだと言え、と思う。

(琉球史研究家)

## 国を愛していた蔡温

### 陰陽五行で森林を重視

蔡温は薩摩を「御国元」と称した。彼は薩摩が琉球の国としての存在を支えていると論じた。薩摩が琉球の「元」という役割をどのように果たしていたかという事は、朱子学の存在論と強い関係がある。蔡温は「国家と言え、大国、小国にかかわらず、陰陽五行が備わり、そして五倫四民の道が確立されればその

ところは国家と言え。五行の中の水火土はどこでもあるが、金と木がなければそのところは国家とは言えない。我が土地の場合は、金はないけれども森林資源はある。金は御国元(薩摩)から輸入でき、それにより不足がないので我が土地は昔から国と呼ばれている」と述べた。蔡温が森林資源を重視し、色々な森林対策を行ったことの一つの理由が、ここに見られる。これは朱子学に基づく蔡温の具体的な国家の定義で

素を薩摩が付与していたのである。薩摩からの物質的要素である。しかし五行が十分あっても、これだけなら国家にならない。五行はただ物質なのである。「五倫四民」、つまり儒学の教えに即している政府組織や社会構造も必要である。

蔡温は「五倫四民」を成し遂げるのは金を輸入するより難しく、立派な課題

蔡温は「五倫四民」の道の実践にほかならないと蔡温は考えたのである。蔡温の琉球国家論における薩摩の琉球の関わりは「昔の聖人のキャリアを考えたなら、彼の琉球国家論は決して空論とは言えない。蔡温の場合には理論と実践は別でなく、相互補足的なものである。蔡温は、外国から来た古琉球の社会に合わない思想である儒学を、十八世紀の琉球社会に押し付けてみ

たのだが、実は、それは彼が自分の国を愛していたがためだと言え、と思う。

(琉球史研究家)